

称号及び氏名	博士(看護学)	足立 安正
学位授与の日付	令和6年9月23日	
論文名	第1子の乳児をもつ父親の親性を高めるためのオンラインプログラムの開発と評価 The development and evaluation of an online program to enhance parenthood among first-time fathers of infants	
論文審査委員	主 査	都筑 千景
	副 査	中山 美由紀
	副 査	渡邊 香織
	副 査	田中 健太郎

論文内容の要旨

【目的】わが国の育児を取り巻く環境は変化し、親になることによってもたらされる特性として「親性」という用語が用いられるようになった。親性を高めることは、母子保健の推進にとって重要であるが、わが国の父親は育児への取り組みが少なく、親性が十分に高まっていない状況にあると考えられる。そこで本研究は、乳児前期の第1子をもつ父親を対象に、親性を高めるためのオンラインプログラムを開発・実践し、その効果検証を目的とした。

【方法】

1. 父親の親性の高さに関係する要因と育児の実態の把握（予備研究1）

乳児をもつ父親の親性の高さとの関連要因と育児の実態を把握するために、生後1-2か月と生後5-6か月時に郵送法による質問紙調査を実施した。本研究は、所属大学の倫理審査委員会(承認番号17027)での承認を得て実施した。対象者665組のうち219組(32.9%)を有効回答とした。生後5-6か月時点の父親の親性高得点群と関連があった生後1-2か月の状況は、父親の年齢、父親の育児家事行動、母親が認知する夫のサポートであった。

2. 自治体による出産前教育の実態把握（予備研究2）

全国の市区町村が実施する出産前教育における実施内容を把握するために、郵送法による質問紙調査を実施した。本研究は、所属大学の倫理審査委員会(承認番号18006)での承認を得て実施した。調査対象である1,914か所の市区町村のうち、643か所(回収率33.6%)から回答が得られた。実施内容では、調乳・授乳の演習(7.6%)や先輩父親からの講話(15.4%)の実施は他と比べ少なかった。

3. プログラムの開発と実施・評価（本研究）

予備研究1を踏まえて、父親の育児家事行動を増やし、母親のサポートニーズと合致し

た支援行動を父親がとることで、父親の親性が高まると考えた。また、予備研究2からは、調乳・授乳をはじめとした育児行動を学べ、父親同士の交流ができるプログラムが必要と考えた。このように父親が育児家事行動や母親への支援行動をとるような行動変容を促すために社会的認知理論(Bandura, 1977)を用いたオンラインプログラムを開発した。プログラムは、父親の行動と母親が期待する支援との違いなどを説明した講話、育児家事行動や乳児との関わり方に関する動画視聴と一部体験、父親同士が交流するグループワークを含めた60分と55分の計2回／コースの構成とした。本プログラムについて、生後1-2か月の子ども(第1子)をもつ父親を対象に非ランダム化比較試験を行った。データ収集は、ベースラインおよび介入から4か月後の時期に自記式質問紙調査にて行った。介入前後に測定したアウトカムは、父親の親性、母親への情緒的支援行動、育児家事行動、育児に対する自己効力感と結果予期とした。分析では、ベースラインにおける群間の差を確認し、有意な差があった場合、この変数と交絡因子になり得る変数を用いて傾向スコアを算出した。介入効果の検証として、アウトカムの介入前後の変化量を従属変数、介入の有無を独立変数、傾向スコアを共変量とした共分散分析を行った。また、補足的に傾向スコアによるマッチングを行い、ベースラインの群間差がないことを確認したうえで、介入後のアウトカムを群間で比較した。本研究にあたっては、大阪府立大学大学院看護学研究科研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号2022-217)。

【結果】 プログラムは9コース開催し、参加した計28人を介入群、対照群に68人を割り付けた。このうち分析対象者は、介入群27人(96.4%)、対照群50人(73.5%)であった。ベースラインの比較では群間で有意差のある変数がみられたため、傾向スコアを算出し共分散分析を行った。その結果、父親の親性の変化量($F=11.1$, $P=0.01$)、母親への情緒的支援行動の変化量($F=21.3$, $P<.001$)および育児家事行動の変化量($F=23.0$, $P<.001$)に有意差がみられた。また、傾向スコア・マッチングの分析では、ベースライン時の比較で群間に有意差はなかった。介入後のアウトカムを群間で比較した結果、父親の親性($t=-4.5$, $P<.001$)、母親への情緒的支援行動($U=28.0$, $P=0.002$)および育児家事行動($t=-3.6$, $P=0.001$)で有意差がみられた。

【考察】 本プログラムの受講によって、父親の親性が高まり、母親への情緒的支援行動および育児家事行動が増え、介入前後の変化量も高まるという介入の効果が確認された。特に、親性の高まりについては、育児技術や乳児との関わり方の動画視聴、母親が期待する支援と父親の行動との相違やコミュニケーションの重要性の講話といったプログラム内容と、社会的認知理論を踏まえた父親の育児支援行動を促す働きかけが影響していたと考えられる。以上のことから、父親は本プログラムを受講することで親性が高まり、子どもの健やかな成長を促す関わりが増加や母親の育児負担感の軽減などにつながり、母子保健の推進に寄与することが期待される。また、母子保健および子育て支援分野において、父親を対象とした取り組みや支援拡大の契機となる可能性がある。

キーワード：父、親性、乳児、オンラインプログラム、非ランダム化比較試験

学位論文審査結果の要旨

本論文は、わが国の父親は育児への取り組みが少なく、親性の発達が十分に促されない現状にあることを背景として、乳児を持つ父親の親性を高めるためのオンラインプログラムを開発し、その効果を検証することを目的で行われた研究である。ポピュレーションを対象としたオンラインの健康教育プログラムの報告は少なく、乳児の父親に対するプログラムは見当たらないことから新規性が認められる。また、プログラム内容は父親の親性の高さに関係する要因と自治体による出産前教育の現状の実態調査を踏まえ、父親の家事育児行動を増やし、母親のニーズに合致するサポートを促すことで親性が高まるという仮説を立て、社会的認知理論を用いてプログラムを開発した点は独創的と言える。

プログラム開発にあたっては、父親の親性、乳児を持つ父親の子育ての実態と関連要因、オンラインプログラムの効果等に対するレビューに加え、プログラム内容については実態調査を踏まえたうえで方向性と仮説を決定し、社会的認知理論に基づいて作成された。プログラムの開発過程は妥当であり、具体的に説明されている。プログラムの提供は、忙しい父親が対象であることからオンラインでの実施とし、知識提供には動画を作成しいつでも視聴できるようにする等、父親が参加しやすい内容を検討していた。プログラムの検証は対象群を置いた準実験研究とし、2回のプログラムを介入群のみに実施後、対象群との比較には傾向スコアで交絡因子を調整した共分散分析を行うなど、適切な方法で分析が行われていた。本研究のすべてのプロセスを通して、倫理指針に則った倫理的配慮が十分であったことを確認した。

介入の結果として、プログラム受講後の父親の親性が有意に高まり、母親への情緒的支援行動と家事育児行動の増加が認められたことから、本プログラムは子育てや仕事に忙しい父親への親性を高めるアプローチとして有用であることが示された。考察では、プログラム効果が見られた親性や効果が見られなかった自己効力感等について検討され、併せて研究の限界や課題についても取り上げ、改善策について検討されていた。論文の論旨は、研究目的、研究方法、結果、考察と一貫して納得できるものであった。本研究で開発されたプログラムは、地域での父親に対する育児支援プログラムとしての実用可能性が期待され、父親の親性の向上と母子保健の推進に寄与するものと考えられる。

以上のことから、本研究は博士論文としての価値を有し、学位の授与に値するものと判断した。